

衣服に対する若者の意識が及ぼす経済的影響

岡村 好美

Influence on economy by the youth's consciousness of clothes

Yoshimi OKAMURA

1. 緒言

一般に「きもの」といわれている衣服は、伝統的な日本の衣服である。日本において洋服を日常着として着用するようになってから100年にもならないが、現在では洋服が主流となり、日常的なきもの着用は殆ど見られない。そしてきものは特別な日あるいは特別な場合に用いられる衣服としての扱いに変わり、きもの離れが進んでいると考えられている。このような状況の中で、近年ゆかたが注目されている。時節にはゆかたに関する情報がマスメディアで取り上げられ、ゆかた姿がファッション雑誌を飾る。ゆかたの着用を入店の条件にしている飲食店もあるようである。きものは平面構成によって形作られる単純な形態であるが、素材や柄などによって様々な意味を表現し、種類名は分類方法によって異なるが、外出着としての機能を有するモノと普段着とに大分類できる。ブームになっているゆかたは湯帷子から転じたモノであり、普段着の域を出ないモノである。一方、近年の一般家庭の経済状況は一概に景気が回復したとは言いきれない状況であり¹⁾、景気の影響を最も受けやすいと考えられているのが衣服であること²⁾を考えると、きもの一種であるゆかたがブームになるという現象からは、きものに対する意識の変化が推察される。

衣服の流行情報に敏感に反応するのは若年齢層であると考えられていることや、今日の流行情報は様々な情報伝達手段によって日本の隅々まで伝えられているが、地域によって衣服の嗜好品種(量)に差があること³⁾から、ゆかたブームの現れ方は地域によって異なることも推測される。

本研究では宮崎市及び周辺地域におけるゆかたブームの実態を調べることを目的として、地域の消費傾向調査および若者を対象とした衣服に対する意識調査を行った。

2. 調査方法

① 質問紙調査

2004年から2006年のそれぞれ7月から10月において、宮崎県の大学生（18歳から23歳）を対象とした質問紙調査を行った。調査人数は2004年度171人（男子90人，女子81人），2005年度184人（男子92人，女子92人），2006年度180人（男子74人，女子106人）である。質問紙を表1に示す。回答は質問に対して「はい」を1点，「いいえ」を5点に得点化し，性別・年度別に平均値の差の検定を行った。

② 家計支出調査

全世帯を対象とした一世帯当たりの年平均一ヶ月間の品目別支出の「被服及び履き物」と「和服」の経年変化から⁴⁾，全国・九州全域・宮崎市の被服消費状況を調べた。また，この結果と質問紙調査の結果から，消費傾向と衣服意識の関係を検討した。

表1 質問紙

	はい				いいえ
	1	2	3	4	5
1. きものを着る機会が比較的多い					
2. きものは洋服と比べて値段が高いと思う					
3. ゆかたの手入れ・保管をするのは大変だと思う					
4. 自分用のきもの（ゆかたを含む）を持っている					
5. きものを着ると動きにくいと思う					
6. きものを着ると気が引き締まる					
7. ゆかたは普段着だと思う					
8. ブランド品のゆかたを好む					
9. 夏祭りや花火大会にはゆかたを着ていく					
10. きものをきると苦しく感じる					
11. 着る機会があればきものを着たい					
12. きものを着たときの立ち居振る舞いは難しいと思う					
13. きもの姿の人を見たら自分も着たいと思う					
14. 自分ひとりでゆかたを着ることができる					
15. きものは正装だと思う					
16. 夏にはゆかたを着たいと思う					
17. 同じ値段ならきものより洋服を買いたい					
18. ゆかたの流行が気になる					
19. きものを着るとくつろげる					
20. ゆかたを選ぶときは人の意見を重視する					

3. 結果および考察

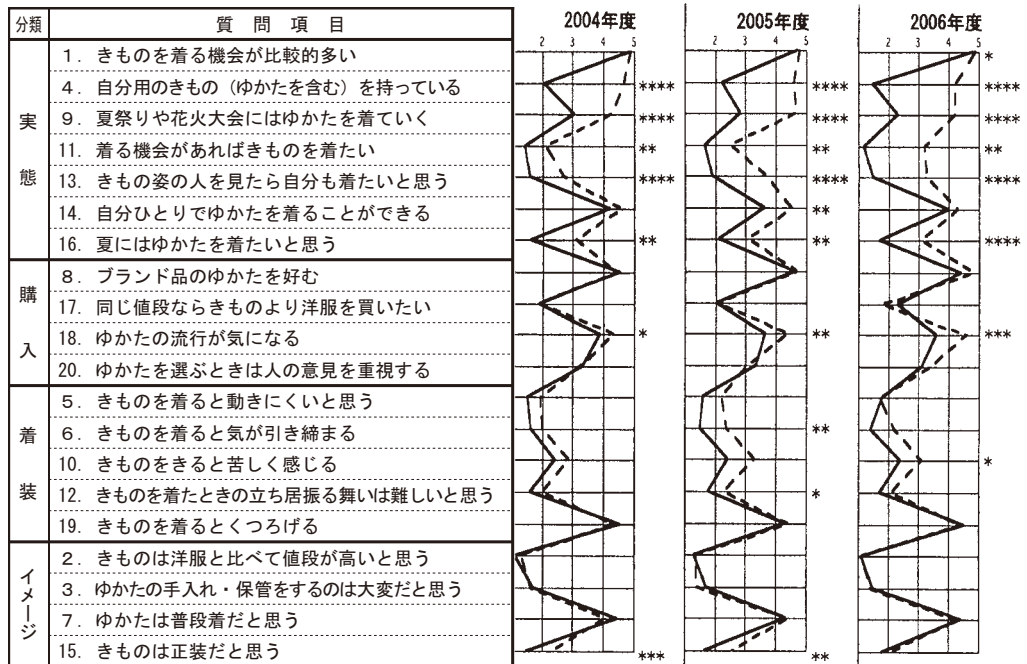
① 質問紙調査

質問紙調査の項目は内容によって，「実態」，「購入」，「着装」，「イメージ」の4つに分類できる（表2）。性別による平均値の差の検定結果を図1に示す。「実態」に分類された項目では性別による差が大きく，「イメージ」の項目で差が小さいという結果になった。3カ年を通じ

て質問紙調査の項目に「はい」と回答した(平均値が小)のは女子の場合に多く、3カ年のうち2カ年以上で男子の平均値が女子より低値を示したのは、「2. きものは洋服に比べて値段が高いと思う」、「3. ゆかたの手入れ・保管をするのは大変だと思う」、「7. ゆかたは普段着だと思う」、「17. 同じ値段ならきものより洋服を買いたい」、「19. きものを着るとくつろげる」、「20. ゆかたを選ぶときは人の意見を重視する」の6項目であった。この結果より、男子学生は女子学生よりきものを着用してくつろげると感じており、普段着だと感じていることがわかるが、平均値が高いことから低い評価であることが解る。一方「ゆかたは手入れや保管が難しく、洋服より高値で、自分の好みを反映させにくい衣服であり、同じくらいの価格なら洋服を買いたい」と思っていることも解った。また6項目は男女差が認められない項目であったことか

表2 質問項目分類

分類	質問項目
実態	1. きものを着る機会が比較的多い
	4. 自分用のきもの(ゆかたを含む)を持っている
	9. 夏祭りや花火大会にはゆかたを着ていく
	11. 着る機会があればきものを着たい
	13. きもの姿の人を見たら自分も着たいと思う
	14. 自分ひとりでゆかたを着ることができる
購入	16. 夏にはゆかたを着たいと思う
	8. ブランド品のゆかたを好む
	17. 同じ値段ならきものより洋服を買いたい
	18. ゆかたの流行が気になる
着装	20. ゆかたを選ぶときは人の意見を重視する
	5. きものを着ると動きにくいと思う
	6. きものを着ると気が引き締まる
	10. きものを着ると苦しく感じる
イメージ	12. きものを着たときの立ち居振る舞いは難しいと思う
	19. きものを着るとくつろげる
	2. きものは洋服と比べて値段が高いと思う
	3. ゆかたの手入れ・保管をするのは大変だと思う
	7. ゆかたは普段着だと思う
	15. きものは正装だと思う



*: P<0.05, **: P<0.01, ***: P<0.001, ****: P<0.0001
 --- 男子 — 女子

図1 性別による影響

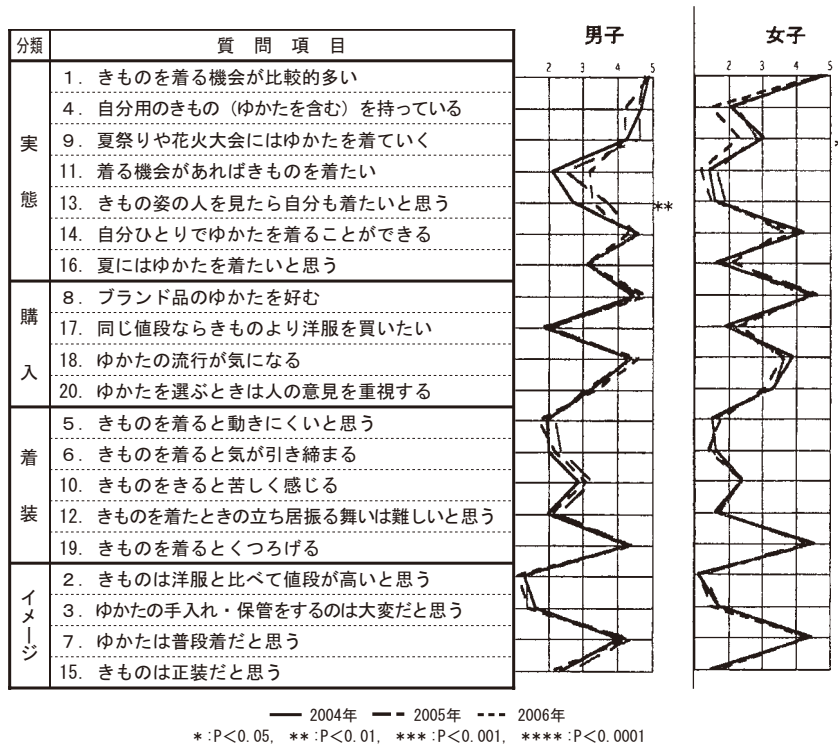


図2 調査年による影響 (2004~2006)

ら、きものより洋服を好む傾向は程度の差はあるが学生全体の意識であると考えられた。また1図では、前述の6項目以外でも着用に対してマイナス効果を示す項目で男女差が認められなかった。このことは、きもの着用にプラスの効果を示す項目で男女差が大きい年度では、きものへの関心が低くなることを示すことになる。すなわち男女差が認められた項目数で大凡の関心度を評価できるとすれば、調査した3カ年では、2005年度は他の年度よりきものへの関心が低かったことが推察できる。

調査年度による平均値の差の検定結果を図2に示す。男子では‘人の着物姿を見て自分も着たいと思う’項目で、女子では‘夏祭りや花火大会にゆかたを着ていく’項目に年度の影響が認められ、これらは何れも「実態」に分類される項目であった。男子のきものを着たいと思う気持ちは2005年度で低く、女子のゆかたを着ていくという行動は2004年度と2005年度で低いことから、共通する2005年度における和服費は2004年度・2006年度とは異なる傾向を示すことが推測できる。

② 家計支出調査

1978年度から2005年度までの一世帯当たりの年平均一ヶ月間の品目別支出(被服および履き物)額を図3-1に示す。全国の支出額は1990年度をピークとして徐々に減少の傾向を示す。九州全域・宮崎市の支出状況は全国に比べて起伏が急激で、特に宮崎市の場合に著しかった。また支出が増加する年度は全国と九州全域では同年度であるが、宮崎市ではほぼ1年送れて現れる傾向であることが認められ、これは特に近年顕著であった。

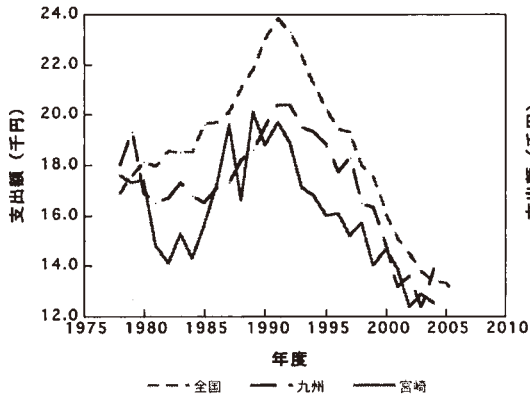


図 3-1 被服および履き物

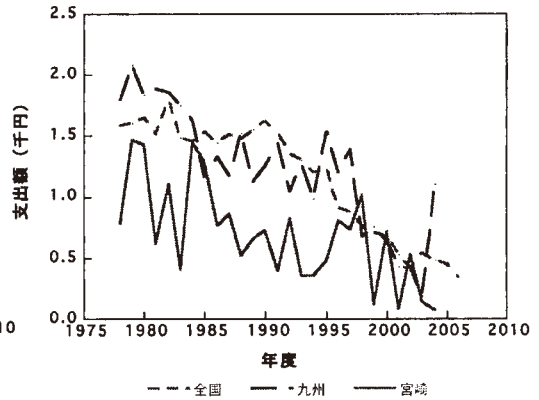


図 3-2 和服

図 3 1世帯当たり年平均1カ月の支出

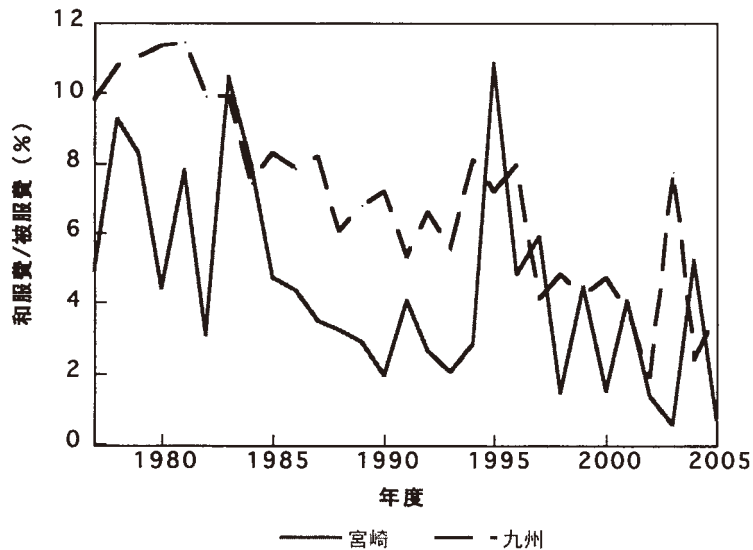


図 4 各年度の被服費全体における和服費の割合

一世帯当たり年平均一ヶ月間の品目別支出（和服）の動向を図 3-2 に示す。全国的には 1990 年頃まではほぼ一定の支出であったが、以後徐々に減少の傾向を示した。九州全域の和服支出額は 1984 年頃までは全国の支出額より高額を示すが、1985 年頃から 1995 年頃までの間は増減を繰り返しつつもほぼ一定の支出状況で、1995 年以後減少に転じている。宮崎市は他の調査対象地域に比べて調査年当初から和服消費額は低く徐々に減少傾向を示しており、増減の起伏は他の地域より大きいことが認められた。九州および宮崎市の被服および履き物支出に対する和服支出の割合を図 4 に示す。九州全域の支出傾向は全国とほぼ同様の推移であったため、宮崎市との比較地域は九州全域のみとした。

被服支出全体における和服支出の割合は、最大で11%程度を示し、宮崎市の支出額は九州全体の1/2程度であった。図4における増減傾向は和服購入の増大あるいは減少（買い控え）の状況であり、したがってこれは和服への注目度を示していると考えられる。九州全域における和服に対する注目度は1978年～1985年、1991年～1997年で高く、この時期が九州全域における一次・二次のゆかたブームであると思われる。そして2000年～2005年の和服への注目度の高まりは、現在の三次ゆかたブームを表していると思われる。数値としては宮崎市は九州全域より低値であるが推移は九州全域より明瞭で、近年は九州全域より1年遅れて九州全域と同様の動向を示した。これは、現時点では2006年度の消費調査結果は報告されていないが、2006年度の宮崎市の和服費は前年度より増加していることを推測させるものである。

このように宮崎市の2005年度の和服消費が2004年度・2006年度に比べて低いことは、衣服に対する学生の意識調査結果とよく対応し、このことから宮崎のゆかたブームには、衣服に対する若者の意識が強く関与していると考えられた。

4. 結果

近年の日本では、日常的に“きもの”を着用する人は少ない。しかしブームと呼ばれる現象が時々現れ、近頃は第三次ゆかたブームといわれている。また一般に着衣に関する情報には、若者が敏感であると考えられていることから、本研究では和服の消費動向と若者の衣服に関する意識調査を行って、宮崎におけるゆかたブームの実態を検討した。その結果、若者の衣服への意識は性別や年度によって変化し、調査した2004年度～2006年度では、2005年度で他の年度より意識の低下が認められた。また2005年度の和服消費は、2004年度・2006年度より低いことが認められた。このように若者の意識の変化は被服消費の動向と対応しており、宮崎市におけるゆかたブームには、大学生に相当する年齢層の意識が強く関与していると考えられた。

文献

- 1) (財)日本統計協会, 統計で見る日本2007, 東京, 50 (2006)
- 2) 小林茂雄, 鈴木淳, 柳許子, 永井淑子, 谷田貝麻美子, 平良美栄子: 衣生活論, (株)アイ・ケイコーポレーション, 川崎, 147 (2005)
- 3) 岡村好美, 井之前千穂子: 若者の着装行動の影響要因に関する調査, 宮崎大学教育文化学部紀要, 10, 9-18 (2004)
- 4) 総務省統計局: 家計調査年報平成13年 (財)日本統計協会, 東京 (2002), 総務省統計局: 家計調査年報平成17年 (財)日本統計協会, 東京 (2005), 内閣府経済社会総合研究所景気統計部 編: 平成18年版 家計消費の動向, 国立印刷局, 東京, (2006)